

# 大和言葉の作り方

(渡部 正路著・叢文社・2009年9月刊)

## 目次

### …………… 原理編 ……………

#### ① 大和言葉の生成<sup>せいせい</sup>

- A** 語義を遡る 8    **B** 語形を遡る 18    **C** 始原に遡る 28  
**D** 語構成の型 42 [表] 動詞の構造 44 名詞の構造 46  
**E** 母音の機能 60

### …………… 事例編 ……………

- ② 夕行語彙 — 付着 78  
③ 八行語彙 — 吹く・振る 108  
④ サ行語彙 — 吸う・進む 128  
⑤ その他の行  
    ワ行 152 ヤ行 154 マ行 156  
    ナ行 158 カ行 160

[付表] 基形と語構成を書いた辞書—サ行語彙 164

## まえがき

日本語の起源論というと、日本語は北方のアルタイ系の語族であるとか、いや南方のインドネシアあたりの言語と関係があるといった議論が行われます。朝鮮語と関係があるという人もいるしアイヌ語と関係するということもあります。

しかしせいぜい似た語があるとか、いくらか類似の特徴が見出されるといった程度で、言語学的に系統性が証明できるというのにはほど遠い現状です。

日本語の系統を云々する前に行わなければならない作業があります。内的再構です。ヤマトコトバの祖型はどうか、それはどのような語成分がどう構成されたものか、どう変遷してきたのかを明確にした後でなければ、比較はほとんど無意味です。

言語の起源論ということこれは人類の発生と同じほど古くそんなものはどうてい分からないという見解が一般的かもしれません。

そうした見方を言語の自然発生論とすれば、本書はやや異なる言語観に立っています。言葉は人々がコミュニケーションの道具として創造したものだという立場です。最初に音と意味を結びつけた約束を作った。その結びつきが複合され多様化し歴史的变化を経て民族の言語になったという立場です。

ヤマトコトバの語彙リストを分析してみると、その組立方がわかり元になった語成分、つまり音と意味との最初の約束を取り出すことができます。それは自然発生的というようなものではなく、明らかに人為的な決めごとです。ルールに則った創造物です。

ヤマトコトバはじつのところそう複雑な言語ではありません。辞書には多数の語が載っていますが、ほとんど複合語で基本的な語彙は限られています。生成が法則的で分析は案外容易なのです。

本書は初心者向けの体裁をとっていますが、ヤマトコトバの生成法則とその原初形態を初めて明らかにした本です。

「傘」のカサ

傘というとは今日ではアンブレラ、つまりステックの上に雨避けの覆いを付けたものを思い浮かべます。しかし、そういう形ものは貴族の時代になって中国から入ってきたもので、それ以前はカサといえはみの箕笠のようなものだったでしょう。頭の上に「重ねる」ものだからカサなのです。

かさぶた瘡蓋のカサ、カサ高いと言う時のカサなども同じ語で、本来の意味は「重なっているもの」です。それが、「カサがはる」とか「水かさ」のように物の外側さらには物自体の意に発展します。また、カサ(嵩)からカサブ(嵩)のような動詞も作られます。

同じように、カザル(飾る)というのも「重ねる」が本来の意味です。「飾る」は「きらびやかなものを付加する」の意味でわれわれは理解していますが、コトバそのものにはそういう情報は含まれていません。単に「重ねる」という語です。

カザルの他動詞がカザス。手をカザスと言うのは手を上にして重ねるようにするの意味です。

カサ・カサブ・カザル・カザス一ではこれらはカサを元にした語でしょうか。まず、次のような語形変化に着目しましょう。

アケ(明) —  $\left\{ \begin{array}{l} \text{アカル(明る)・アカス(明す)} \\ \text{アカ(赤)} \end{array} \right.$

同様に、カサ・カザス・カザルなども次のように考えられます。

カス —  $\left\{ \begin{array}{l} \text{カサ(傘)・カサ(瘡)・カサ(嵩)・カサブ(嵩ぶ)} \\ \text{カサヌ・カサナル(重なる)} \\ \text{カザル・カザス} \end{array} \right.$

つまり次の動詞が元だと考えられるのです。

カス = 上にする

てかせ手枷・あしかせ足枷という場合のカセという語も、カスに基づく語で、「(手や足に)重なるもの」ということです。



傘はなぜカサなのでしょう？  
次のようなカサを含む語群に注目  
しましょう。

カサ (傘・笠)  
カサ (嵩)・カサブ・カサバル・カサム  
カサヌ (重なる・重ねる)  
カザル (飾る)・カザリ (飾り)

## 隠す・囲む・限る

隠す・囲む・限る—これらの語には一見何の繋がりもありそうには見えません。まして「隠す」ことをなぜカクスと言うのかななどと問われても普通は困るでしょう。

じつはこれらの語は、カクからできた兄弟語なのです。

カク = 囲いをする

という語が元になっています。カキ(垣)はこの名詞形です。

カクス・カクル(隠) …この二語は、カクに動詞語尾ス・ルを付した語形です。つまり、「隠す」というのは目的のものを囲って見えなくすることであり、「隠る」とは相手から見えない囲いの中に入ることなのです。さらに発展してカクマフともなります。

カコム・カコフ…これらはカクに動詞語尾ム・フを付した語です。カク→カコのようなo母音への変化は、

オツ(落)→オトス(落とす)・オトル(劣る)・オト(弟)

などと同じものです。じつは上代語には、カクム(囲)という語形も見受けられます。このことからカクムからカコムのような形の発達は奈良時代を遡るさほど遠くない時期だと推定されます。

カギル(限) …カクをカキとした上で動詞語尾ルを付した語です。日を「限って」とか命の「限り」という「限る」から、今日私たちは「囲う」を意識することはありません。しかし、

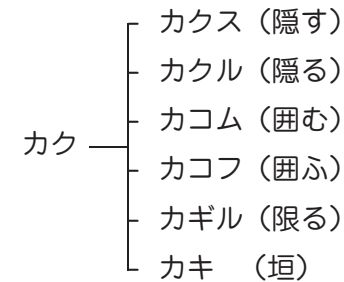
カギル=その部分を囲うこと

なのです。カクを元に、カク(ス)、カコ(フ)、カギ(ル)など母音を変えて語尾を膠着し、多様な語を生み出しています。

このように普段は繋がりが無いと思っている語の間にも起源的には同一の語から出ているということがあるのです。

意味的・語形的に関連を持つ語群を単語家族と言います。人間に祖先があるように、単語家族にも祖形があります。これから行おうとしているのはその祖形を明らかにする作業です。

「カク」という語が次のような語に発展します。



## 膠着による語生成

日本語は言語学上の分類から膠着語こうちやくごとされています。膠着にかわというのは、膠にかわでくっつけるという意味で、単語の後ろに膠にかわでくっつけるように別の成分を付加して新たな言葉を作る言語だということです。

例えば、ツクルという語は、ツクに動詞語尾「ル」を付加した語です。この場合のツクは「付く」。だからツクルとは、木材などを順々に付加させていき、家などにすることだといえます。さらに、ツクルに語尾「フ」を付加してツクロフ(繕ふ)を作ります。この「フ」は反復・継続を表し「再び作る」というのがツクロフというわけです。膠着的な変化を二重に繰り返して言葉を生み出しています。

ツク→ツクルという変化ばかりでなく、ツク(付く)からは、ツク→ツカと母音変化して、ツカム(掴む)やツカフ(使ふ)などの語が作られます。ツカムはさらにツカマルと変化し、ツカフはツカハス・ツカヘルと変化します。今日、「捕まる」や「遣はす」「仕える」という語を見ても、この語がツク(付)と関係があるなどとはとても思えないでしょう。しかし語構造的に見るとツクを元に派生してできた語と見るほかないのです。

ツカは単独で「束(掴むところ)」ともなります。末尾母音を a に変えて名詞を作るのは、

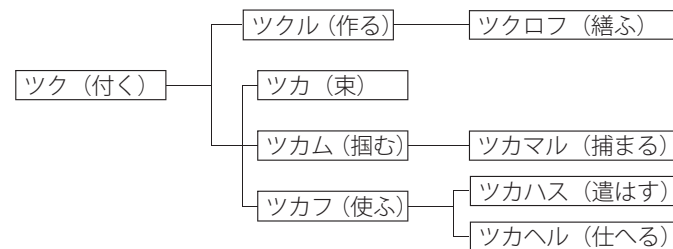
ナフ(縛ふ)→ナハ(縄)      ムル(群る)→ムラ(村)

など多くの用例があり、ツクにはツク(築く)もあるのですが、こちらの方はツカ(塚)という名詞を作ります。

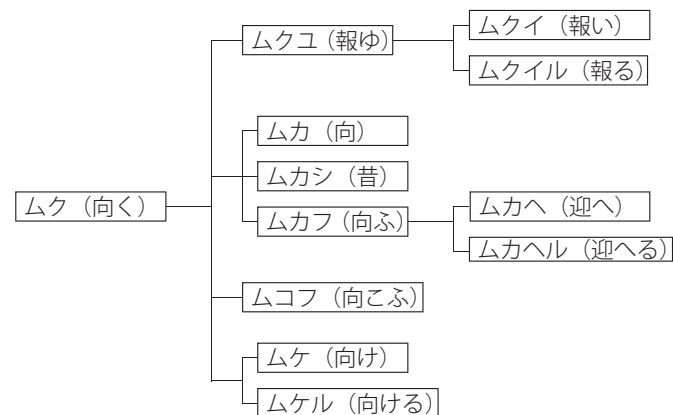
右ページ下段ではムク(向く)が作る語の例をあげました。「報い」や「昔」となると「向く」とはだいぶ離れています。「報い」= (自分の行為に対し)向かう物」「昔」= (時間的)向こう」なのですが、状況を捨象した極めて単純な表現になっています。

## ヤマト言葉は「膠着」により次々と生成される

### 付く



### 向く



語生成の例 — (1) 動詞

呪ふ (ノル→ノロフ)

「<sup>ノル</sup>る→<sup>ノロフ</sup>呪ふ」です。「<sup>ノル</sup>る」は名ノル・<sup>のりと</sup>祝詞のノルで声を出すことを言い、人を怨む意はありません。ノブ(述ぶ)も同様の語。

選ぶ (エル→エラブ)

エル(得る)→エラブ。「選ぶ」は「得る」ことのバリエーションなわけですが。同様に、クラブ(比ぶ)はクル(繰る・めくる)、シラブ(調ぶ)はシル(知る)からきています。

残る (ノク→ノコル)

ノク(除く)→ノコル(残る)です。ノケル(除)も同じです。ノゾク(除)のゾは強調辞でノク→ノゾクという語形成です。

悩む (ナユ→ナヤム)

ナユ(萎ゆ)→ナヤム(悩む)です。ナユ(萎ゆ)は本来植物が萎えることですが気持ちがナエルのようにも使います。同様に、クヤム(悔む)・クヤシ(悔し)はクユ(崩)を元にした語です。

加える (クフ→クハフ→クハヘル)

「加える」とは「<sup>くは</sup>銜える」こと。「銜える」というのはもちろん犬が銜えているという「銜える」です。クハハルともなります。

疲れる (ツク→ツカル→ツカレル)

元の語はツク。この場合のツクは「尽く」ということ。精も魂も尽き果てるというのが「疲れる」ということです。

例えば (タツ→タトフ→タトヘル)

「例える」とは事例を「立てる」こと。タツ(立)→タトフ(例)です。「例えば」は「例えれば」が省略されたもの。

働く (ハタル→ハタラク)

「追い立てる」ことをハタルと言いました。これは「端る」で、「端に追い詰める・(魚などを)追いやって取る」が原意です。「働く」は「追い立てられる」ことでした。



次の語はどんなコトバを元にして作られているでしょうか。

(1) 動詞

呪う	□□ → ノロフ
選ぶ	□□ → エラブ
残る	□□ → ノコル
悩む	□□ → ナヤム
加える	□□ → クハフ
疲れる	□□ → ツカル
例えば	□□ → タトフ
働く	□□□ → ハタラク

「足す」と「足る」

マハス(回す)・マハル(回る)はマフを基にした語です。マフ(舞)は踊りではなくて本来回転の意でした。

同様の語形変化は日本語の中に多くあります。

カフ(交) — [カハス            オツ — [オトス  
                  [カハル                       [オトル

これらの例の動詞語尾スとルは次のような機能を持っています。

ス = 他動詞化語尾 (対象に働きかける動作)

ル = 自動詞化語尾 (対象の状態)

さて、「足す」と「足る」も次のように違います。

タス = 対象に働きかける動作

タル = 対象の状態

つまりタスは他動詞、タルは自動詞であるわけです。だとするとタスが他動詞であるのは語尾スの機能、タルが自動詞であるのは語尾ルの機能といえます。ス・ルは一般に動詞についてその動詞を他動詞化もしくは自動詞化しています。

では、タス・タルの場合、動詞語尾ス・ルが付加した基の語はなんのでしょうか。

元の語が動詞だとしたら、その動詞は「ツ」だと考えられます。ス・ルを付加する場合、マフ→マハ(ス・ル)、カフ→カハ(ス・ル)のように元の動詞の語幹を a (もしくは o) に変化させています。これと同じ変化で、ツ→タとなっていると考えられるのです。

今日、われわれは「付け足す」という言い方をします。これは、「足す」という動作が「付ける」という動作によって行われるという日本人の認識を示しています。

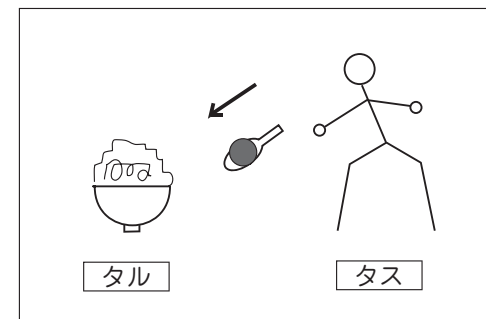
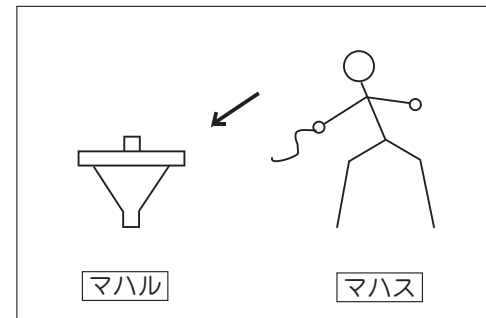
このようにタス・タルの元の語がツだと想定するのは、日本語の原則的一般的な語形変化であり、かつまたそう見ることが語義的にも合うのです。

次のような変化があります。

マフ(舞ふ) — [マハス  
                  [マハル

では、次の□にあてはまる語はなんでしょう。

□ — [タス(足す)  
          [タル(足る)



## 「取る」と「手」

『広辞苑』には次のような説明があります。

トル【取る】 手と同源

同源と言うのは曖昧な言い方で「手」から「取る」ができたのか、「取る」から「手」ができたのか明確にしません。

私もこの同源説に賛成したいのですが、この両者は次のように「ツ」を媒介にして捉えるべきと考えるのです。

ツ(付) — トル(取る)  
          — テ (手)

ツ→トルは、オツ(落)→オトル(劣) の語頭のオを取った形。つまり、ツ(付)に語尾を付し動詞語幹とするに際して、ツ→トと1音節動詞「ツ」の語幹を変化させたもの。

ツ→テは、ハツ(果)→ハテ(果)の語頭のハを取った形。すなわち、ツ(付)に名詞化の変化が起こった形。

もちろん日本語に類似の変化があるというだけでは説明として不十分です。この変化の意味は後の章で扱います。

ここでは、ツ→タの名詞化について説明しておきましょう。大野晋氏は、手の古形をタとみて、それにiが付いたという説明をしておられます。しかし手をタというのは被覆形だからです。tui → te であり、ui → e という変化があったと考えるべきです。「木」は kui に遡り普通は「キ」となりますが、『書紀』や『万葉』には「ケ」と読んでいる事例があります。ui は i にも e にもなるのです。

また沖縄方言には、この ui が残っているように見えます。『奄美方言分類辞典』では、目を「ムいー」、手を「ていー」と書いています。ムいー(目)は mui でしょうが、手も目も母音部の発音は同じですから、手も本来 tui と推定されます。動詞+i→名詞という語形成が一音節語にも適用されているのです。

右表のように、足す・足る・取る・手はツ起源となるわけです。

「足す」・「足る」・「取る」・「手」は、「ツ(付)」起源とみると都合がよい。

ツ(付) — タス(足す)  
          — タル(足る)  
          — トル(取る)  
          — テ (手)

[註]

『奄美方言分類辞典』  
(長田須磨・須山名保子・藤井美佐子・笠間書院 1977年)  
奄美方言データベース(沖縄方言研究センター WebSite)



## 「サス」と「サル」

ツ→タス・タルと同様の例をあげましょう。サスとサルです。

サスは「指す・射す・刺す・挿す」など様々に書き分けられますが、それはわれわれが場面に応じて漢字を使い分けているにすぎず、本質的に「線条に進む動き」を表します。

一方、サルは、今日では「去る」で帰って行くことにしか用いませんが、古くは「来る」ことも言いました。「春されば」といえば「春になると」という意味だったのです。すなわち、

サス…線条に進む

サル…時間的・空間的に進む。「来る」または「帰る」意。

となるのです。

つまり、サルにしてもサスにしてもイメージとしていえば「矢印をつけた直線」で表される概念なのです。

次のように考えられます。ススム(進む)のように同音の続く語は、タタク・ヒビクなどと同様、オノマトペ(擬音語擬声語)的色彩の強い語です。ススムという意のスは、「スーッと動く」「線条に動く」ということを表す音だった。だからこのスを元に

スグ(直ぐ・過ぐ)

スキ(タスキのスキ。タは手、スキは帯)

ススム(進む)

などの語ができる。そして、この「ス」に動詞語尾ル・スを付けるに際し、「動詞語幹をa形に変える」という操作が行われて

ス — { サス  
          サル

というようにコトバが形成されたと考えられるのです。

古代語で「ス」といえば、スルのス(為)しかありません。ス(為)は「物事を進める」意ですが、本来は広く「進む」意だったものが、特定の意味だけが残ったものと考えられるのです。

次の□に入る語は何でしょう？





## 「寝る」意の「ヌ」

「寝る」は古くは「ヌ」でしたが、尊敬語としては「ナス」と言いました。ヌ→ナと変化させた上でスを付しています。「ヌ(寝)」を「ナ(寝ることを)ス(行う)」と表現することによって尊敬表現を作っていますが、これは「食ふ」よりは「食事する」といえば少し丁寧に聞こえるようなものでしょうか。

ところで、ネルというのはどういう動作でしょうか。「睡眠」の意味はもちろんですが、「寝転がる」「寝そべる」など「横になる・横たわる」という意味でもよく使います。

ヌ = 横になる・横に広がる

これがヌ本来の意味だと考えると俄然理解できる語が増えます。

海が「凪ぐ」といえば、波立たず穏やかになることで、「海の波が横になっている」と解されます。また、「薙ぐ」といえば「横様に切り倒す」ことです。

また、地面が平らなことをナルシ(平し)、平らにすることをナラス(平す)といいます。これらは「ナル=横に広がる」を元に作った語と考えられます。さらに、

ナラブ(並ぶ) ナラフ(習)

などの語もナルの派生形です。これらの語は

ナル(横に広がる) = 横展開する

ということです。

ナラフという、われわれは「学ぶ」意ととってしまうかもしれませんが、世の習いというように、前例と横並びに物事を行うというのが本来の意味なのです。

それだけではありません。ナダラカはナルシ(平)と同意であり、ナダム(なだめる)は気持ちを平らにすることです。また、ナガル・ナガス(流)はナグを元にした語ですが、このナグというのも「横移動」です。これらは語形的意味的にヌ起源と解されるのです。

「寝る」意の古語「ヌ」の本義は次の通り

### ヌ = 横に広がる

ヌ	ナグ (薙ぐ) … 横様に払う
	ナギ (凪ぎ) … 波が横である
	ナル
	ナルシ (平し) … 横である
	ナラス (平す) … 横にする



## 日本語生成の原理

大和言葉は母音変化を伴う膠着を二度、三度と繰り返すことによって生成されたものである。これが日本語生成の原理です。

1 音節語→2 音節語→3 音節語→4 音節語→

ツク→ツカム、ツカム→ツカマルのように2音節→3音節、3音節→4音節間の変化についてはこれまでよく知られてきました。それが日本語における一般的な語形変化です。とすると1音節語→2音節語の間にも同様の変化があるというのが自然です。ただ1音節→2音節におけるプロセスではヌ→ナグ、ツ→タスのように語の外見の変化が大きく案外気づきにくいのです。

大和言葉の原初は1音節動詞です。この1音節動詞というのは、スーッと動くのスとか、ヌルヌル・ネバナバのヌのように本来的には動作を表す擬態語と言ってよいものです。大和言葉はこういう単純な音を起源にし、多様な枝分かれや組み合わせの結果として生み出されていると考えられるのです。

ただ一音節起源というとすぐに江戸の音義説を思い起こし拒否反応を起こす人がいるかもしれません。一音節論はだめだという思いこみが学説の進展を妨げてきた面があると思います。

従来説は、語の根源的意味という発想に思い至らなかったのです。「ヌ=寝」ではなく「ヌ=横になる」であり、更に言えばじつはヌは泥地の泥のようなものの擬態語であり、粘着性流動性を表すのに用いられる音なのです。ですが従来説は、ヌ(寝)という語義の表面だけを見ており、根源の意味に気づかなかったのです。

コトバの現象を整理し、その現象を引き起こしている本質的な要素を明らかにしていく作業が必要です。本書ではまず言語要素の組み合わせ方(語構成)を説明します。また大和言葉では語成分の接着に母音が特別な働きをします。これらを語構成論・母音機能論として明らかにした後、個々の語を見ていきます。

大和言葉は母音変化を伴う膠着を重層的に繰り返して生成されている。  
原初の形は1音節動詞である。

ヌ → ナグ → ナガル → ナガレル

母音変化を伴う膠着を繰り返す。